

# 私たちは何者？ ボーダレス・ドールズ

The Infinite World of Japanese Dolls: From Religious Icons to Works of Art



## 【開催概要】

2023年7月1日(土)～2023年8月27日(日)

前期:7月1日(土)～7月30日(日)

後期:8月1日(火)～8月27日(日)

※会期中、一部展示替えがあります。

開館時間:午前10時～午後6時 \*毎週金曜日は午後8時まで(いずれも入館は30分前まで)

休館日:月曜日(ただし、7月17日は開館)、7月18日(火)

入館料:一般1,000円(800円)、大学生800円(640円)、高校生・60歳以上500円(400円)、小中学生100円(80円)

※( )内は団体10名以上及び渋谷区民の入館料

※土・日曜日、祝休日及び夏休み期間は小中学生無料

※毎週金曜日は渋谷区民無料

※障がい者及び付添の方1名は無料

リピーター割引:観覧日翌日以降の本展会期中、有料の入館券の半券と引き換えに、通常料金から2割引でご入館できます。

主催:渋谷区立松濤美術館 協力:一般財団法人日本玩具文化財団、横浜人形の家

会場:渋谷区立松濤美術館

〒150-0046 東京都渋谷区松濤2-14-14

電話: 03-3465-9421 HP: <https://shoto-museum.jp>

\*本展覧会の出陳作品には、18歳未満の方(高校生を含む)がご覧になれない作品が一部含まれます。あらかじめご注意くださいようお願い申し上げます。

\*会期や開館時間、イベント等変更する場合があります。最新情報は当館ホームページ等でご確認ください。

## ■ 報道関係のお問い合わせ ■

広報担当:西・木原・野城 メール:[pr-sma@shoto-museum.jp](mailto:pr-sma@shoto-museum.jp) 電話: 03-3465-9421 FAX: 03-3460-6366

展覧会担当:野城・平泉

\* 画像をご希望の場合は、作品名の前にある番号(①～⑩)をお知らせください。

\* 画像のご利用後、データは破棄してください。 \*画像の使用は、本展のご紹介をいただける場合のみとさせていただきます。

\* 基本情報確認のため、一度校正をお送りください。

## 展覧会概要

日本の人形といったら、みなさんは何を思いおこすでしょうか。お雛様？呪い人形？それともフィギュアでしょうか？はたまた、生人形や蠟人形、マネキンも、日本の人形を語る上で欠かせないものでしょう。

このように日本の人形は、もはや、体系化することが難しいほどに多様な種類があふれているのです。

そして、日本の人形の歴史を振り返れば、民俗、考古、工芸、彫刻、玩具、現代美術と、実にさまざまなジャンルのボーダーラインを縦横無尽に飛び越えながらあり続けていることがわかります。分野を問わない、曖昧な存在を武器として生きながらえてきた唯一無二の造形物が人形といえるでしょう。

本展は、そんな日本の人形の一括りにはできない複雑な様相を、あえて「芸術」という枠に押し込めず、多様性をもつ人形そのものとして紹介することで、日本の立体造形の根底に脈々と流れてきた精神を問うものです。

何かに縛られることなく軽やかに境界を越えていく日本の人形は、普段、私たちが囚われている「美術」、あるいは「芸術」という概念にさえ揺さぶりをかけます。私たちは一体何を「芸術」とし、何を「芸術」ではないとしているのか。それは果たして正しいのか。人形をとおし「芸術」そのものを考える機会となるでしょう。



① 《人形代 [男・女]》  
平安京跡出土  
平安時代前期  
京都市指定文化財  
京都市蔵

## 第1章 それはヒトか、ヒトガタか

人形——すなわち、ヒトガタとは何か。その問いと向き合うことからこの旅ははじまります。この章では、平安時代の呪具であった考古遺物・人形代(画像①)や、民間信仰の場で使用されたオシラサマといった民俗資料から、人間が人形を表すことの意味について考えていきます。

展示資料: 人形代、サンスケ、オシラサマ ほか

## 第2章 社会に組み込まれる人形、社会をつくる人形

今日の多くの日本人のイメージと記憶の中に刻まれている人形のひとつは、雛人形や五月人形といった、毎年、ある季節になると私たちの目の前に現れるものでしょう(画像②)。例えば、雛人形は、貴族や公家社会の年中行事の中で、子どもの健康を願うとともに、社会の規範を子どもに教えるためにも用いられました。ここでは、雛人形をはじめ、御所人形、武者人形といった、ときに社会にくみこまれ、ときに社会の「あるべき姿」をつくった人形を紹介します。

展示作品: 雛人形、御所人形、武者人形 ほか

## 第3章 「彫刻」の誕生、「彫刻家」の登場

前章の雛人形や御所人形などの人形は、江戸時代までは美的な造形物として人々に生活の中に存在していたもののひとつでした。しかし、明治時代になると、日本政府は、海外諸国と肩を並べる国となるべく、廃仏毀釈と文化の西洋化を推し進めることとなります。その過程で、新しく日本へもたらされた「美術」の概念のひとつが「彫刻」でした。

ハイアートとしての「彫刻」の概念が育っていくにつれて、人形は「彫刻」、あるいは「美術」の範囲からはずれていきます。しかし、実際には、小島与一《三人舞妓》(画像③)のように、現在からみれば彫刻としても認められる精工な作品がつけられたほか、「彫刻家」に手ほどきを受けながら市井の人々による《伊那踊人形》(画像④)のような素朴な作品も制作されました。

ここでは、近代以降に理論形成していく「彫刻」の中に生き続ける人形の遺伝子を紹介していきます。

展示作品: 小島与一、森川杜園、平櫛田中、農民美術運動 ほか



②  
【後期展示】  
《立雛(次郎左衛門頭)》  
江戸時代・18~19世紀  
東京国立博物館蔵  
:Image: TNM Image Archives



③  
小島与一《三人舞妓》  
1924年  
アトリエ 一隻眼蔵  
撮影: 山田満穂



④ 川路農美生産組合 《伊那踊人形》  
1920~30年代 上田市立美術館蔵  
撮影: 齋梧伸一郎

## 第4章 美術作品としての人形 一人形芸術運動

「彫刻」という概念が登場したことで、美術という概念からこぼれ落ちた人形が、ようやく美術のひとつとして認められたのは昭和時代初期、「人形芸術運動」が盛んになった頃でした。

この章では、人形も美術品だということを主張した、平田郷陽や堀柳女(画像⑤)など人形作家たちの名品を紹介します。

展示作品:久保佐四郎、平田郷陽、堀柳女 ほか

## 第5章 戦争と人形

昭和初期～中期は、人形が「芸術」という枠組みに進出していき、人形芸術運動が隆盛していく華々しい時代である一方、日本は第二次世界大戦へと突入し、人形界にも軍靴の足音が近づいてきます。

この章では、人形作家の高浜かの子《騎馬戦》(画像⑥)といった、制作背景に戦争が関係する人形作品から、市井の人々、特に出兵した青年たちに最後まで寄り添った《慰問人形》までを展示し、時代に翻弄された人々が人形に何を求めていたのかを考えます。

展示作品:池田修三、高浜かの子、慰問人形 ほか

## 第6章 夢と、憧れと、大人の本気と

人形は、美術となった一方で、何気ない生活を彩るものとして愛されている一面もあります。フレンドリーでありつつ、美的な要素を持ち合わせる人形は、少女たち、あるいは大人たちにも夢を与えるとともに、憧れの対象ともなりました。

ここでは、身の回りに美的なものを置くことで、生活を豊かにすることを意図した、竹久夢二(画像⑦)のような芸術家による人形を紹介します。人々に夢と希望を与え、日常を豊かにする人形の造形からは、本気で遊びを迫及する大人たちの姿勢がうかがえるでしょう。

展示作品:竹久夢二、河村目呂二、中原淳一 ほか

いきにんぎょう

## 第7章 まるでそこに「いる」人形 一生人形

幕末から明治初期にかけて、市井の人々の生活の中にあつた人形のひとつが、生人形でした。まるで、本物の人間がいるかのようなリアリティは、近代になり再び人々の注目の的となっていきます。

ここでは、群馬県桐生市・祇園祭の山車人形として使用された松本喜三郎《素戔鳴尊》(画像⑧)をはじめとして、肖像彫刻としての生人形や、地域の偉人を紹介するためにつくられた生人形などを展示します。

展示作品:安本亀八、松本喜三郎 ほか

## 第8章 商業×人形×彫刻＝マネキン

人形の中には、商業で活躍したものもあります。その中でマネキンは、ファッション業界や百貨店といった商業の現場にあつた人形です。

島津製作所創立者の長男で、東京美術学校彫刻科を卒業した島津良蔵は、人体模型のノウハウを活かしたマネキンの国内生産に乗り出します。そんな島津のもと集まったのは、彫刻家の荻島安二と向井良吉でした。彼らは、芸術性の高いマネキンをつくりだし、七彩工芸社(現:株式会社七彩)の創設へと繋がっていきます。今回は、荻島・向井(画像⑨)のマネキンとともに、両氏が制作した彫刻作品も紹介します。

商業と人形と彫刻という、さまざまな要素が重なったとき、マネキンという美しさと機能性に富んだ造形物が生まれたことに気がつくでしょう。

展示作品:荻島安二、向井良吉



⑤ 堀柳女《踏絵》  
1933年 吉徳資料室蔵



⑥ 高浜かの子《騎馬戦》  
1940年 国立工芸館蔵  
撮影:アローアートワークス



⑦ 竹久夢二《ピエロ》  
1930～1934年  
国立工芸館蔵  
撮影:ニューカラー写真印刷



⑧ 【前期展示】  
すさのおのみこと  
松本喜三郎《素戔鳴尊》  
1875年  
桐生市本町四丁目自治会蔵



⑨ 向井良吉《SA-10》  
1952年  
株式会社七彩蔵  
©MASAYUKIHAYASHI

## 第9章 ピュグマリオンの愛と欲望を映し出せ！

日本の人形界では、多くの人々の心と身体に寄り添ってきたラブドールなどの性を扱った人形が、決して無視できないものとして存在しています。人間と人間の究極的な関わり方を実現する人形の製作背景や技術を探るとき、人形と人間の関わり方の本質のひとつがみえてくるのではないのでしょうか。

展示作品：ラブドール ほか

## 第10章 ヒトガタはヒトガタ

人形を巡る旅は、現代に生きる作家たちの人形で幕を閉じます。

現代では、「人形」の姿を借りることで、自己の内面、あるいは思想を表現する作家がいます。球体関節人形などにみる、内省的表現に心を奪われる人は多いのではないのでしょうか。

その一方で、現代美術家の村上隆とフィギュア原型師のBOMEによるタグでつくられた《Ko<sup>2</sup>ちゃん(Project Ko<sup>2</sup>)》(画像⑩)は、「オタク」文化の中で育まれたフィギュアをハイアートに昇華させ、世界に衝撃を与えました。「部屋の中で楽しむもの」として日本人に育まれた人形は、日本の文化・精神性を象徴するものとして世界に羽ばたいていきました。

現代において人形は、もはやジャンルに縛られず、人間を表す「ヒトガタ」というニュートラルな存在として受け入れられています。本章では、その様相を紹介します。

展示作品：天野可淡、工藤千尋、BOME、松崎寛、村上隆、四谷シモン



⑩

村上隆《Ko<sup>2</sup>ちゃん(Project Ko<sup>2</sup>)》  
1/5原型制作 BOME(海洋堂)  
1997年 個人蔵

©1997 Takashi Murakami/Kaikai Kiki Co., Ltd. All Rights Reserved.

## 各種イベント

### ◆展覧会担当学芸員によるピンポイントトーク

7月30日(日)

肉体のリアルは人形のリアルか

— 一生人形、マネキン、現代美術まで

8月11日(金・祝)

呪って、守って、愛して♡ 人形は人間？

— 呪詛人形、お雛様、現代美術まで

8月26日(土)

彫刻と人形のただならぬ関係

各日午後2時～(約30分) 会場：地下2階ホール(直接会場へお越しください)

※各回定員60名(先着順) ※無料(要入館料)、予約不要

### ◆館内建築ツアー

白井晟一設計の美術館建築を職員がご案内します。

7月7日(金)、7月14日(金)、7月21日(金)、7月28日(金)、8月4日(金)、8月11日(金・祝)

8月18日(金)、8月25日(金)

各日午後6時～(約30分間)

### ■次回の展覧会のご案内■

杉本博司 本歌取り 東下り

会期：2023年9月16日(土)～11月12日(日)

\* 展示替えあり



杉本博司《カリフォルニア・コンドル》1994  
ピグメント・プリント 作家蔵